

研究業績等に関する事項

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
著書	1『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』	共著	平成20年10月	青弓社	【編著者】戸ノ下達也、長木誠司【著者】他6名 アジア太平洋戦争期の日本の総力戦体制における音楽を音楽学、歴史学、教育学、政治学等の諸観点から論じた。酒井は論文「国際文化振興会の対外文化事業—芸能・音楽を用いたものに注目して」(127～158頁)で、当時の対外文化政策の一例として国際文化振興会の事業に注目し、それがナショナリズム、アイデンティティ、オリエンタリズムといった観念に支えられていたことを明らかにした。
著書	2『公立文化施設の指定管理者制度における評価の現状とそのあり方～川崎市と横浜市を事例に～』	共著	平成23年3月	昭和音楽大学	【編著者】中村晃也、永山恵一、酒井健太郎他 公立文化施設の「指定管理者制度」(平成15年度の地方自治法の一部改正により導入)における「評価」の現状と今後のあり方について、横浜市と川崎市のケースに注目して調査・研究をおこない、その成果をまとめた。調査・研究の主体は昭和音楽大学の教員を中心とした共同研究グループである。酒井はプロジェクトの概要について執筆したほか、編集・校正作業をおこなった。
著書	3『戦う音楽界—『音楽文化新聞』とその時代』	共著	平成24年3月	金沢文圃閣	【編者】戸ノ下達也、洋楽文化史研究会 日本音楽文化協会が発行した『音楽文化新聞』と『日本音楽文化協会会報』は、同時期の日本の音楽界の動向を知るための重要史料である。本書はこれらの史料の複製刊行にあわせて企画・刊行された。酒井は論文「日本音楽文化協会による対外宣伝の側面—『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」(125～147頁)の執筆と、『日本音楽文化協会会報』の索引データの作成を担当した。
著書	4『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』	共著	平成26年11月	ココ出版	【編者】第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文編集委員会 2012年11月に香港で開催された第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウムの研究発表やパネルディスカッションの成果を一冊にまとめたもので、言語、社会、経済、歴史など多面的に日本語教育・日本研究を捉えることを目指した。酒井は李貞恩、松岡昌和、チェンチュア カール・イアン ウィと共に「近現代アジアにおける文化アイデンティティ—帝国日本の文化発信ならびに現地での受容と展開」(925～939頁)を執筆、寄稿した。
著書	5『戦後の音楽文化』	共著	平成28年1月	青弓社	【編著者】戸ノ下達也 1945年から70年にわたる(戦後)の音楽文化を、社会との関係において総覧した読む事典として編まれた。酒井は、「ニューミュージック」「メセナ」「平成」「ストリートミュージック」「動画投稿サイト」「VOCALOID(ボカロ)」「音楽メディアの変遷」「復興と音楽」の8項目(掲載順)を寄稿した。
学術論文	1「複製芸術論—アドルノとベンヤミン」(学位論文)	単著	平成12年3月	筑波大学第二学群比較文化学類平成11年度卒業論文	哲学者・音楽学者・社会学者のTh. W. アドルノと、アドルノが兄事した批評家・思想家の W. ベンヤミンの、両者による複製芸術論に関する哲学的・美学的思考を比較・検討した。アドルノが「積極的聴取」を志向した一方で、ベンヤミンはそれに拘らないこと、またそれに拘束されないことに新しい芸術の肯定的なありようの可能性を見出していたことを論じた。
学術論文	2 'Hemocyanin Subunits of a Whipscorpion, Typopeltis crucifer, and a Primitive Spider, Heptathela kimurai: Orthologous Hemocyanin Subunits in Arachnids.'(査読付) (タイワンサソリモドキとキムラゲモのヘモシアニン・サブユニット—節足動物のオルソログスなヘモシアニン・サブユニット)	共著	平成13年3月	"Zoological Science", 18(2): pp.269-275.	[Author] T. Kuwada, K. Sakai and H. Sugita. N-terminal amino acid sequences of nine subunits prepared from hemolymph of a whipscorpion, <i>Typopeltis crucifer</i> and a primitive spider, <i>Heptathela kimurai</i> , are determined. Based on a comparison of the sequences, it is confirmed that the orthologous hemocyanin subunits are shared between or among the whipscorpion, the scorpion and the primitive spider, that suggests some monomers of arachnid hemocyanin originated from a common ancestral gene. Sakai determined amino acid sequences of some subunits. 【著者】桑田隆生、酒井健太郎、杉田博昭 タイワンサソリモドキとキムラゲモの血リンパから得た9つのヘモシアニン・サブユニットのN末端アミノ酸配列を解析・比較した結果、サソリモドキ、サソリ、原始グモがオルソログスなサブユニットをもつことが明らかになった。これは蜘蛛綱のヘモシアニンを構成するサブユニットの一部が、同一の祖先遺伝子に由来することを示唆する。酒井はアミノ酸配列の解析の一部を担当した。
学術論文	3「『紀元2600年奉祝楽曲演奏会』の研究—国際文化振興会(KBS)の役割」(査読付)	単著	平成14年3月	筑波大学大学院芸術学研究科『芸術学研究』第6号、1～8頁	皇紀2600年にあたる昭和15(1940)年に、日本では多くの奉祝行事が開催された。紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会はそのひとつである。本論文はこの演奏会の目的、企画・実施の経緯、演奏会に関係した人物や団体について整理・検討し、この演奏会が平和主義的影響を受けつつ企画され、最終的には当時の日本の音楽状況ならびに日本が建国から長い歴史をもつことを対外的にアピールする効果があったことを論じた。
学術論文	4「『紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会』の研究」(学位論文)	単著	平成15年3月	筑波大学大学院芸術学研究科平成14年度修士論文	昭和15(1940)年に開催された紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会の企画および実施の諸経緯について整理・検討した。特に当演奏会の企画と準備に関与した国際文化振興会(KBS)について重点的に論じた。KBSは国際連盟的な平和主義にもとづく国際文化交流団体であったが、同時期の日本での対米英国主義論の強まりの影響を受けて、徐々に性格を変えていった。このことが演奏会の性質に影響を与えたことが示唆された。
学術論文	5「『紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会』の実施過程にみられる『平和主義思想』」(査読付)	単著	平成15年12月	『第53回美学学会全国大会当番校企画報告書』、170～179頁	紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会(昭和15(1940)年)の企画・立案および開催に関与したと考えられる国際文化振興会と、当演奏会への作品の作曲を委嘱されたB. フリテンのそれぞれの思想的背景を検討した。その結果、当演奏会が単に主権主義的であったのではないこと、日本の文化水準の対外的なアピールの意図があったことが示唆された。本稿は平成14年10月の美学学会全国大会における研究発表を論文化したものである。
学術論文	6「日本近代化と音楽—国楽・唱歌・五線譜—」(学位論文)	単著	平成18年3月	筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻平成17年度博士論文	明治期に日本が近代化するにあたり、音楽をどのように用いたか明らかにすることを目的として、次の3つの観点から論じた。日本の西洋音楽導入がいかなる意味で「近代的」な文化政策であったか論じた。(1)「国楽」はいかなる意味において「近代」的な概念であるか。(2)小学校で教授された唱歌は国家主義思想といかなる関係にあったか。(3)五線譜導入が日本の音楽状況にいかなる影響を与えたか。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
学術論文	7「展示された音楽—音楽取調掛の 博覧会参同とこの国のかたち」 (査読付)	単著	平成20年3月	昭和音楽大学音楽芸術運営研究所『音 楽芸術運営研究』、第1号、13～34頁	文部省の音楽取調掛は明治12(1879)年に設置され、明治20(1887)年に東京 音楽学校(現東京藝術大学音楽学部)の設置に伴い発展的に解消された。音 楽取調掛はこの間、海外での博覧会に少なくとも3度、参同したことがわかって いる。本論文はその時の出品物を、博覧会に関する政治的・思想的観点から 分析し、音楽取調掛の博覧会参同の根拠にはナショナルイズムやオリエンタリズ ムといった近代的な観念が横たわっていたと論じた。
学術論文	8「(大東亜共栄圏の音楽)の構想 —『音楽公論』(昭和16年11月～昭 和18年10月)にみる」(査読付)	単著	平成21年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第28号、42 ～53頁	昭和初期の音楽専門誌『音楽公論』(昭和16年11月～昭和18年10月)に掲載 された言説を分析の対象として、「大東亜共栄圏」に関する思想において、日 本あるいは大東亜共栄圏の音楽文化がいかに構想されたか論じた。その結 果、音楽が芸術としての高みを目指すことよりも、「生活」と密接に関連するべ きと考えられたことが明らかになった。
学術論文	9「日本少国民文化協会(1941～45 年)の事業について」(査読付)	単著	平成21年3月	昭和音楽大学音楽芸術運営研究所『音 楽芸術運営研究』、第2号、3～17頁	日本少国民文化協会(昭和16(1941)年設立)の思想的性格を明らかにするこ とを目的として、同協会の事業を分析した。その結果、同協会は少国民文化あ るいは少国民文化財に関わる大人を対象にした事業を第一義としていたこと、 同協会による行事「ミナウタヘ」大会や絵本『ウタノエホン』は、音楽を用い て日本国の国民や大東亜共栄圏の国民の統合を目指した例であると考えら れることが明らかになった。
学術論文	10「ギルドホール音楽院《コネクト》 の創造的ワークショップについて」 (査読付)	共著	平成21年7月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸 術マネジメント』、第1号、67～77頁	【著者】酒井健太郎、赤木舞 ①英国ギルドホール音楽院の《コネクト》プロジェクトによる創造的ワークショップ実践の 手法を紹介し、②ワークショップが参加者による共同体の形成を経ておこなわれることを 論じた。参加者はバックグラウンドや能力に拘わらず、ワークショップの共同体を構成・ 運用する主体と化す。この点に創造的ワークショップの特徴を見出すことができる。酒井 は研究の全体構想と論文の特に②の考察を担当した。
学術論文	11「音楽における「近代の超克」— 諸井三郎の「近代」観念」(査読付)	単著	平成22年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第29号、27 ～36頁	座談会「近代の超克」は昭和17(1942)年7月23～24日に13人の学者や批評家 らが出席して催された。本論文は作曲家諸井三郎の座談会での発言、座談会 の事前論文やその他の論考を対象にして、諸井の「近代」観念について分析し た。その結果、諸井は、西洋文化と日本の古典文化を止揚して新しい文化を 創ることが「近代」を超克することであり、そのような音楽は「普遍性」「生活性」 をもつ音楽であると考えていたことが明らかになった。
学術論文	12「柳澤健の思想における文化相 対主義と「大東亜共栄圏」」(査読付)	単著	平成22年3月	昭和音楽大学音楽芸術運営研究所『音 楽芸術運営研究』、第3号、5～21頁	アジア・太平洋戦争期の日本の対外的な文化政策・宣伝活動のひとつの事例 として、日本とタイ王国の間での文化交流事業に注目した。とりわけ昭和18・ 1943年にバンコクに設置された日泰文化会館の館長を務めるなど、1940年代 前半の日タイ間の文化事業において重要な役割を果たした。柳澤健の対外文 化事業についての諸論考を分析し、彼の思想における文化相対主義ならびに 「大東亜共栄圏」観念について考察した。
学術論文	13「Japanese National Music and Cultural Identity: Analysis of Articles in Japanese Musical Magazines in Early 1940s」(英文) (日本の国民音楽と文化的アイデン ティティ——1940年代前半の音楽雑 誌記事の分析)	単著	平成22年4月	The Musicological Society of Japan, "International Forum for Young Musicologists 2010", 99～104頁	In this paper, the thoughts about Japanese national music during 1941-1944 are clarified and classified through analyzing articles in musical magazines of the time. Then cultural identity of Japanese musical circles is discussed. As a conclusion it could be said that recognition of capability to create new music by assimilating diverse music might have worked as Japanese cultural identity, which support self-definition to be a leader of the Greater East Asia Co-Proprosperity Sphere. (1941～44年の日本の音楽雑誌に掲載された記事の分析を通して、日本の 「国民音楽」に関する思想を整理・類型化し、それをもとに当時の日本の楽壇 における文化的アイデンティティについて論じた。その結果、日本人が多様な 音楽を折衷して新しい音楽を創造する能力を持つという自己認識が文化的アイ デンティティとして機能していたこと、そうした認識が「大東亜共栄圏」の盟主 という自認を支えていたことが明らかになった。)
学術論文	14「『邦楽』と『洋楽』——1940年代 前半の日本の音楽専門誌における 「国民音楽」論」(査読付)	単著	平成23年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第30号、65 ～77頁	1940年代前半に日本で発行された音楽専門の雑誌・新聞に掲載された記事 のうち、日本の「国民音楽」に言及したものを対象に、それらが日本の「国民 音楽」の創造・確立の必要性をいかに論じたか、そのために伝統的「邦楽」と西 洋由来の音楽「洋楽」をいかに用いるべきと論じたか分析した。その結果をもと に、当時の音楽領域における日本人の文化的アイデンティティのありようを考 察した。
学術論文	15「柳澤健の1940年代タイにおける 事績—柳澤健研究2」(査読付)	単著	平成23年3月	昭和音楽大学音楽芸術運営研究所『音 楽芸術運営研究』、第4号、5～17頁	昭和初期の日本の対外的な文化政策史の研究はまだ十分ではなく、またアジ アで唯一の同盟国タイとの文化交流の実態は明らかでないことが多い。これら の研究の足場を得るには、柳澤健に注目するのがよいだろう。柳澤は1930年 代の日本の対外文化事業の草創期に外務官僚としてそれに関与し、1940年 代前半にバンコクに設けられた日泰文化会館の館長を務めた人物である。本 稿は柳澤の思想と事績を解明する意義を述べ、その一部を整理・記述した。
学術論文	16「『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌 集』(1943年)研究序説—研究の意 義と方法」(査読付)	単著	平成24年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第31号、59 ～68頁	『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』は日本音楽文化協会、日本少国民文化協 会、朝日新聞社が協働して編集し、昭和18(1943)年9月に発行された「少国 民」向けの唱歌集である。本論文は、まずこの唱歌集について研究する意義を 論じ、さらに考えうるいくつかの視点(例えば、文化・芸術作品として、少国民文 化財として、対外文化事業のツールとして等)を指定して、それぞれの視点で の研究の手法と内容を検討した。
学術論文	17「『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌 集』の歌詞と絵の分析」(査読付)	単著	平成24年3月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所 『音楽芸術運営研究』、第5号、19～29 頁	『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』は、昭和18(1943)年に、対外的な文化宣 伝に用いるために刊行された絵付きの唱歌集で、そこに掲載された歌詞や絵 は、当時の日本の対外的な文化政策に関する思想を反映している。本稿は、 『大東亜共栄唱歌集』に掲載された唱歌の歌詞と絵を分析して、この唱歌集が どのような観念に支えられて成立したか論じ、さらに当時の対外的な文化政策 ／宣伝におけるこの唱歌集の位置づけを考察した。
学術論文	18「オーケストラの社会貢献活動— 仙台フィルハーモニー管弦楽団を 中心に」(査読付)	共著	平成24年10月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸 術マネジメント』、第4号、77～85頁	【著者】赤木舞、酒井健太郎 日本のプロオーケストラは近年、コンサートホールでの演奏活動に加え、社会 貢献活動を重視するようになった。本稿は東日本大震災の被災地での仙台 フィルハーモニー管弦楽団の復興支援活動に注目して、今後のオーケストラ の社会貢献活動のあり方について検討し、従来とは異なる音楽コミュニケー ションの観点を導入する必要があると論じた。酒井は主に音楽コミュニケーション に関する考察を担当した。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
学術論文	19「近現代アジアにおける文化アイデンティティ-帝国日本の文化発信ならびに現地での受容と展開-」	共著	平成24年11月	香港日本語教育研究会、香港城市大学中文・翻訳及言語学学科『第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 予稿集』、815～822頁	【著者】チェンチュア・カール・イアン・ウイ、松岡昌和、李貞恩、酒井健太郎 植民地の文化に関しては、植民者の被植民者に対する優位が注目されることが多いが、被植民者が植民者の文化を变形しながら受容して新たな混合文化を形成したことも看過できない。本稿はこの両面に注目し、近現代アジアにおける帝国日本の文化工作とその受容・展開について多様な視点から議論した。酒井は日・タイ間の文化事業の事例報告と原稿の編集を担当した。
学術論文	20「芸術の社会化とアートマネジメント—芸術の「体験」に注目して」(査読付)	単著	平成25年10月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』、第6・7合併号、85～96頁	近年は(職業アーティストではない)一般のひとが、芸術の企画、運営、創造などの諸段階に参加し、それらを主体的に体験する機会が増えた。本稿はこうした現象に注目し、まず主に美術の領域における社会的な取り組みを概観し、芸術が社会において果たする役割について述べた。次に音楽の社会的な取り組みにどのような実践があるかいくつかの事例を挙げて検討し、近年の現象に対応したアートマネジメントのありようを検討した。
学術論文	21「昭和初期の対外文化事業における伝統と普遍—『国際文化』誌の邦楽に関する記事にみる」(査読付)	単著	平成26年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第33号、4～16頁	財団法人国際文化振興会(以下KBSと略記)の機関誌『国際文化』の1938(昭和13)年～1944(昭和19)年発行分に掲載された記事を分析して、この期間のKBSによる対外文化事業の対象国・地域、内容、目的などの変化を辿った。その結果、この時期の対外文化事業の性格が、欧米諸国に対する日本の文明性と伝統性(近代西洋文化と伝統芸能)の両面のアピールから、アジア諸国・地域との協力関係の構築と文化の相互理解を通じた「大東亜共栄圏文化」の創造をめざした、文明性・融和性の協調へと転換していったことが明らかになった(ただし後者において日本はその盟主であると自認していたことは看過できない点である)。
学術論文	22「だれがどのように能楽を享受したか—近代日本の「能楽観」の変化について—」	単著	平成26年11月	香港日本語教育研究会・香港大学專業進修学院『第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』、377～381頁	近代日本人の音楽観から、近代日本の文化的アイデンティティを透かし見ることができよう。ただしそれには、西洋由来の音楽だけでなく、日本の伝統音楽・芸能が、社会的にどのように位置づけられたか考慮する必要がある。本稿は伝統音楽・芸能のうち能楽を対象とし、近代日本人の観能態度のありようとその変化について検討した。それをもとに能においては庶民が楽しむ「芸能・娯楽」から、集中的・構造把握的な鑑賞の対象としての「芸術」への変化があったことを指摘した。
学術論文	23「近代オリンピックにおける芸術競技、芸術展示、文化プログラム—2020年オリンピック東京大会に向けて」(査読付)	共著	平成26年12月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第6号、103～108頁	【著者】酒井健太郎、吉原潤 本稿はまず近代オリンピックにおいて、文化プログラムの前身として実施された芸術競技に目を向けて、それがおこなわれるようになった経緯、実施の概略、日本からの参加の状況を整理・概観した。その上で、近年の芸術展示およびその後の文化プログラムの実施状況を整理し、さらに、2020年東京大会における文化プログラムの在り方に関するいくつかの課題を整理・検討した。
学術論文	24「日本開催のオリンピックにおける音楽芸術の役割」(査読付)	共著	平成26年12月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第6号、109～116頁	【著者】吉原潤、酒井健太郎 2020年のオリンピック東京大会は、文化・芸術をいかに活用すべきだろうか。本稿はこの問いに答えるためのヒントを得るために、これまで日本で行われた3回のオリンピック大会(1964年東京、1972年札幌、1998年長野)における文化プログラムおよび関連行事にて、音楽芸術がどのように活用されたか検証した。
学術論文	25「藤原義江の南米演奏旅行(1937-38年)—自伝・評伝・外務省記録の検討」(査読付)	単著	平成27年3月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』、第8号、59～76頁	藤原義江(1898-1976)は「われらのテナー」と評され、愛された。彼の音楽活動や人生については、これまでに複数の自伝・評伝・小説が刊行され、おおよそのことは明らかになっているように思える。しかし詳細に検討すると、従来の言説には欠落や齟齬が少なくないことがわかる。1937-38年の南米演奏旅行はその一例である。そこで本稿は、この演奏旅行に関する自伝・評伝・小説等の記載を比較・検討し、その上で信頼に足ると思われる一次資料をもとに、この演奏旅行での藤原の足取りを検討した。
学術論文	26「東京音楽学校と邦楽—昭和11年の邦楽科開設を中心に」(査読付)	単著	平成27年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第34号、32～44頁	音楽取調掛の後身として1887(明治20)年に開校した東京音楽学校では、選科の扱いで邦楽(当初は山田流箏曲)の教習がおこなわれるようになり、それが徐々に拡充され、1936(昭和11)年には邦楽科が本科や師範科と同列に扱われた。本稿はこの邦楽科設置に注目して、それに至るまでの音楽取調掛・東京音楽学校における邦楽の扱い、邦楽科設置の思想やそれに対する関係者の反応についてまとめ、東京音楽学校における邦楽科設置の背景を検討した。
学術論文	27「1930-40年代のタイ-日本の文化交流事業について—実施機関・団体に注目して—」(査読付)	単著	平成27年3月	タイ国日本研究国際シンポジウム2014論文報告書編集委員会(編)『タイ国日本研究国際シンポジウム2014論文報告書』、チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科学科日本語講座(発行)、46～61頁	本稿では1930-40年代のタイと日本のおこなわれた文化交流事業のありようを、特に1942年締結の日泰文化協定と翌年設立の日泰文化会館に注目して論じた。その結果、当時の両国間の文化交流の取り組みにおいては、日本側に積極的な姿勢が見られるが、タイ側はそれほど積極的であったとは言えないことが明らかになった。これには両国を取り巻く国際関係や国内政治の状況が強く影響していたと考えられることを指摘した。
学術論文	28「音楽家クラウス・プリングスハイムの晩年の教育活動—田村徹氏へのインタビューをもとに」(査読付)	共著	平成28年3月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』、第9号、73～80頁	【著者】酒井健太郎、吉原潤 ドイツ出身のクラウス・プリングスハイム(1883-1972年)はヨーロッパ、日本、シヤム(タイ)、アメリカにおいて、作曲家、演奏家、教育者として活動したことが知られている。しかしとりわけシヤムに渡って以降の後半生には不明点が多い。この欠落を埋め、音楽家としての彼を総合的な視点から把握することは、日本だけでなくヨーロッパ、アジアの音楽史においても重要である。筆者らはプリングスハイムに和声法や作曲などを学び、彼の晩年のアシスタントを務めた田村徹氏にインタビューをおこない、プリングスハイムが日本と海外の音楽会を繋ぐ役割を果たしたという手がかりを得た。本稿では特に晩年のプリングスハイムの教育活動について、氏の証言をもとに記述した。
学術論文	29「フランス・エッケルトがいた頃の文部省音楽取調掛(明治16～19年)—エッケルトの功績を検討するために」(査読付)	単著	平成28年3月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』、第9号、81～95頁	フランス・エッケルト(1852-1916年)は日本と韓国で、長きにわたって軍楽を中心に西洋音楽を指導した人物である。日本では海軍・陸軍の軍楽隊、宮内省式部職、文部省音楽取調掛での西洋音楽研究・伝習に携わった。本稿は、エッケルトの音楽取調掛における業績を論じる前段階として、彼が同掛で担当した業務の内容、伝習生への指導内容・方法などについて、これまでに参照できた資料をもとに整理した。
学術論文	30「アジア太平洋戦争期の日本軍政下「南方」における文化政策:『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)を中心に」	共著	平成28年11月	『第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』(ノンブルなし)	【著者】松岡昌和、酒井健太郎、丸山彰、織田康孝 「南方」向けに編集・刊行された唱歌集『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(朝日新聞社、1943年、以下『ウタノエホン』)を手がかりに、まずその編集・刊行の経緯を確認した上で、日本内地で策定された音楽による文化政策のプランが、ジャワとシンガポールという二つの占領地でどのように遂行されたか検討した。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
学術論文	31「オーケストラの子どもむけプログラムについて—2016年10月の事例から」(査読付)	単著	平成29年3月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』、第10号、81～88頁	平成28年度文化庁「文化芸術による子供の育成事業(巡回公演事業)」の一事例として、熊本県宇城市立松合小学校における山形交響楽団のコンサートを対象として、コンサートの内容と同校校長・教頭先生へのインタビューを整理し、できるだけ詳細に記述した。それをもとにより良い子ども向け音楽プログラムのあり方を検討した。
学術論文	32「クラウス・プリングスハイムの日本での音楽活動について—昭和音楽大学オペラ研究所「オペラ情報センター」を利用して」(査読付)	単著	平成29年3月	昭和音楽大学『研究紀要』、第36号、113～123頁	1931(昭和6)年に来日し、1972(昭和47)年に死去するまでの40年間あまりのほとんどを、日本を拠点に音楽活動(教育、演奏、作曲など)をした、ドイツ出身のクラウス・プリングスハイム(1883-1972)の業績を再評価する研究の一環として、昭和音楽大学オペラ研究所「オペラ情報センター」を利用した。その結果から見えてくることを報告するとともに、人文科学系の研究においてデジタル情報化技術が有益であること、それにとめない生じる課題に言及した。
学術論文	33「昭和初期の対外文化政策としての「国際放送」——1930年クリスマスの交換放送に注目して」	単著	平成29年12月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第9号、149～155頁	日本を中心とするラジオ放送の黎明期の歴史を概観し、「国際(交換)放送」と「海外放送」の相違を確認した。その上で1930年のクリスマスに際しておこなわれた、アメリカと日本および他国・地域間での「国際放送」の実施者の経緯と内容を、『東京朝日新聞』ならびに『読売新聞』の記事をもとにして整理した。以上をもとに、当時の日本の対外文化政策において「国際放送」をいかに位置づけるか検討した。
学術論文	34「ドイツ人音楽家クラウス・プリングスハイムはタイに何を求めたか——第2次世界大戦後の書簡から」	単著	平成30年3月	『日タイ言語文化研究』、第5号、39～58頁	クラウス・プリングスハイム(1883-1972)は、指揮者、作曲家、音楽評論家、音楽教育者として知られる。1931年の来日以来、死去までのほとんどの期間を日本を拠点に活動した。1937-39年に彼はジャム(現在のタイ)に滞在し、現地で音楽学校を設立する計画に関与した。それは実現しなかったが、その後彼とタイの関係者間で交流が続いた。本研究では彼とタイの関係者との間でやり取りされた書簡を分析し、そこから彼がタイの旋律にもとづく楽曲の楽譜を探し求め、さらにはラーマ9世王のバレエ作品Manorahの日本公演を実現しようとしていたことを明らかにした。
学術論文	35「1930年代のラジオ「国際放送」の音楽コンテンツ:日本人の「文化的アイデンティティ」に関する考察に向けて」(査読付)	単著	平成31年3月	『音楽芸術運営研究』第12号、35～56頁	本稿の目的は、1930年代の日本の放送局がおこなった「国際放送」で用いられた音楽コンテンツを整理・分析し、当時の日本人の「文化的アイデンティティ」を考察する足がかりを得ることである。1930年代の新聞記事をもとに調査したところ、音楽による「国際放送」は最低37番組おこなわれたことが判明した。それぞれの番組について名称・目的、相手国・地域(放送局)、放送内容などを抽出し、音楽コンテンツをもとに類型化し、年代、相手国・地域などのクロス集計を試みた。純粋に定量的に分析できたわけではないが、当時の日本人の「文化的アイデンティティ」は、純粋な「邦楽」や「洋楽」(のみ)にあったのではなく、歌謡曲、和洋合奏、「邦楽」を改作・編曲したものなど、折衷的なもの(も)あったということが示唆された。
学術論文	36「『音楽取調掛時代文書綴』にみるフランツ・エッケルト」	単著	平成31年3月	ヘルマン・ゴチェフスキ(研究代表者)『近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究:お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に』、77～97頁	フランツ・エッケルト(1852-1916)は、明治16(1883)年2月から明治19(1886)年3月まで、文部省音楽取調掛の備外国人教師を兼務した。本稿は彼が兼務していた頃の音楽取調掛の記録を調査し、エッケルトに関わる文書の解読を試みた。対象としたのは「東京芸術大学附属図書館貴重資料データベース」に収録された『音楽取調掛時代文書綴』のうち25の簿冊である。文書を解読した結果をもとに「音楽取調掛によるエッケルト雇傭に向けた準備」と「エッケルトと日本伝統音楽・芸能」に注目して論じた。
1. 研究発表・報告	1「紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会の思想的研究」	—	平成14年10月	第53回美学会全国大会ポスターセッション(広島大学・東千田キャンパス)	紀元二千六百年奉祝楽曲演奏会(昭和15(1940)年)の企画立案および開催に関与したと考えられる国際文化振興会と、当演奏会への作品の作曲を委嘱されたB. プリテンの、両者の思想的背景を検討した。当演奏会は単に主観主義的であったとは言えないことを明らかにした。
1. 研究発表・報告	2「伊沢修二の《国歌》概念」	—	平成16年2月	洋楽文化史研究会第24回例会(東京大学・駒場キャンパス)	明治期の日本における西洋音楽導入のキー概念である「国歌」について、先行研究を整理し、今後の研究のあり方を検討した。特に伊沢修二の思想と実践に注目し、伊沢による日本の西洋音楽の導入が、近代国家としての日本の統合と強化を第一義としていたと論じた。
1. 研究発表・報告	3「明治初期の「国歌」概念について——国民国家形成と欧化」	—	平成17年10月	第56回美学会全国大会(慶応義塾大学・三田キャンパス)	明治期の日本における「国歌」概念を、「国民国家の形成」と関連づけて論じた。「国歌」創成の主張およびその一方策としての西洋音楽の導入は、日本の近代化、すなわち近代的な「国民国家」の形成・強化の一環であって、両者は密接に関連していたことを明らかにした。
1. 研究発表・報告	4「西洋音楽受容の政治的意図——対外宣伝の側面に注目して」	—	平成17年10月	日本音楽学会第56回全国大会(明治学院大学・白金キャンパス)	明治期の日本のおかれた国際状況を把握し、それをもとに、音楽取調掛の「対外文化宣伝」の効果期待しうる事業について、その「近代性」の観点から整理・検討した。対外的な文化宣伝は、宣伝主体のアイデンティティと深く関係しており、音楽取調掛による対外的な事業は、一方で対内的な文化統合の側面を持っていたことを明らかにした。
1. 研究発表・報告	5「津金澤聰廣・近藤久美(編著)『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』について」	—	平成16年2月	洋楽文化史研究会第39回例会(東京大学・駒場キャンパス)	「タカラヅカ」は女性のみにより演じられる独特の「歌劇」で、歴史学、音楽学、文化論、社会学、アート・マネジメント論等において、多様な観点から論じられる興味深い対象である。本発表では、「タカラヅカ」研究の最新の成果(当時)である津金澤聰廣・近藤久美(編著)『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』に掲載の諸論考を、ジェンダー論、ポストモダン論等の観点から評し、以後の研究の方向性について検討した。
1. 研究発表・報告	6「英国ギルドホール音楽院(コネクト)によるワークショップ実践の理論についての一考察——日本での実践のための方法論の構築を目指して」	—	平成20年11月	日本音楽芸術マネジメント学会第1回研究大会(東京芸術大学・上野キャンパス)	【発表者】酒井健太郎、赤木舞 英国ギルドホール音楽院の「コネクト」プロジェクトによる創造的ワークショップは、参加者の自発性を重んじ、参加者が共同性と主体性を獲得することに特徴がある。本研究は、創造的ワークショップの日本における実効的な実践のための理論の構築を目的に、「コネクト」の創造的ワークショップ実践の理論と方法の理解を試みた。酒井は研究全体の構想と、実践理論の構築に向けた検討を担当した。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
1. 研究発表・報告	7「奥中康人『国家と音楽—伊澤修二がめざした日本近代』について」	—	平成21年8月	洋楽文化史研究会第55回例会(東京大学・駒場キャンパス)	奥中康人『国家と音楽—伊澤修二がめざした日本近代』(春秋社、平成20年)を評した。これまであいまいなままにされていた伊澤修二の思想を、本作品が明確に論じたことの意味は大きいと述べた。さらに、本作品を踏まえてなされる今後の研究の可能性に言及し、明治期の日本の音楽思想について検討するにあたっては、不平等条約改正という国家的な目標と深く関係する文化政策の側面を看過すべきではないことを指摘した。
1. 研究発表・報告	8「Japanese National Music and Cultural Identity: Analysis of Articles in Japanese Musical Magazines in Early 1940s」(英文)(日本の国民音楽と文化的アイデンティティ—1940年代前半の音楽雑誌記事の分析)	—	平成22年5月	日本音楽学会 International Forum for Young Musicologists 2010(慶應義塾大学・日吉キャンパス)	This presentation dealt with the thoughts on Japanese national music during 1940-44 and discussed what the Japanese cultural identity at that time was. It concluded that (1) capability of cultural assimilation was thought to be a special ability peculiar to Japanese, and (2) Japanese musical identity was not found at Japanese traditional music itself; rather at the Japanese capability to make new music by assimilating diverse musics. (本発表は1940~44年の日本の国民音楽に関する思想を分析の対象にして、当時の文化的アイデンティティのありようを明らかにした。その結果、(1)日本人の文化的折衷の能力は日本人に固有の特殊能力であると考えられたこと、(2)日本人の音楽的アイデンティティは日本の伝統音楽そのものではなく、日本人が多様な音楽を折衷して新しい音楽を作り出す能力をもつことに見いだされたことを結論として得た。)
1. 研究発表・報告	9「ラウンドテーブル」グローバル化する音楽学—日本からの提言」	—	平成23年11月	日本音楽学会第62回全国大会(東京大学・駒場キャンパス)	【パネリスト】伊東辰彦、Klara HRVATIN、酒井健太郎、新堀欽乃、川本聡胤 平成22年5月開催のInternational Forum for Young Musicologists 2010の成果と、それにより明らかになった課題について議論した。酒井は、日本の歴史が日本と日本以外との関係において紡がれるもので、いわゆる「日本史」のような一國史はもはや成り立たないことが明らかになった今日、海外の研究者とのコミュニケーションは必須であると述べた。伊東氏による報告が『音楽学』57(2)(平成24年3月)に掲載された。
1. 研究発表・報告	10「オーケストラの社会貢献活動—仙台フィルハーモニー管弦楽団を中心に—」	—	平成23年11月	日本音楽芸術マネジメント学会第4回秋の研究大会(昭和音楽大学・南校舎)	【発表者】赤木舞、酒井健太郎 平成23年3月の東日本大震災発生以降の仙台フィルハーモニー管弦楽団の活動に注目して、プロオーケストラの今後の地域貢献活動のありかたについて検討した。酒井は、被災した人々に対する音楽活動には、従来の演奏活動とは異なる性質をもつ音楽コミュニケーションの側面を見てとれること、また、それに注目することにより音楽活動の今後のあり方について示唆を得ることができることなどを考察した。
1. 研究発表・報告	11「パネルセッション 近現代アジアにおける文化アイデンティティ—帝国日本の文化発信ならびに現地での受容と展開—」	—	平成24年11月	第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム(香港城市大学)	【パネリスト】チェンチュア・カール・イアン・ウイ、松岡昌和、酒井健太郎 植民地の文化に関して研究するにあたり、被植民者が植民者の文化を变形しながら受容して新たな混合文化を形成したことを看過できない。本セッションはこれに注目し、近現代アジアにおける帝国日本の文化工作とその受容・展開についてフィリピン、シンガポール、タイの事例をもとに議論した。酒井は昭和初期の日・タイ間の文化事業の事例の報告と予稿の編集を担当した。
1. 研究発表・報告	12「アジア・太平洋戦争期の音楽観—邦楽を中心に—」	—	平成25年3月	洋楽文化史研究会第73回例会(早稲田奉仕園・セミナーハウス)	【発表者】酒井健太郎、袴田麻祐子 アジア・太平洋戦争期の日本人の文化的アイデンティティを解明することを目的に、当時の邦楽や対外文化事業に関する雑誌記事の論調を分析した。酒井は研究計画全体と後者の考察を担当し、大東亜共栄圏に対する文化事業では、対象国・地域の文化を理解することと大東亜共栄圏の新しい文化を創造することに心が向けられたこと、事業に邦楽が用いられるケースは限られていたことを明らかにした。
1. 研究発表・報告	13「芸術・文化と社会」	—	平成25年11月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所 研究員会議(昭和音楽大学・南校舎)	学術的自己紹介として、関心領域とそれに至る経緯(来歴)ならびに今後の研究課題を述べた。具体的には、発表者の関心の背景にあるのは、生物学(生物の偶然性)、近代思想(現象学)、芸術学・文化論(芸術・文化の社会構築性)であること、今後は、近代日本の文化・芸術に関する思想とそれを通じて見る社会の構造、現代社会における音楽・文化のあり方や我が国の文化・音楽振興(コミュニケーションとしてのアート)といったテーマの研究を深めることにより、より人類世界の形成に貢献したいと述べた。
1. 研究発表・報告	14「東京音楽学校と邦楽—1936(昭和11)年の邦楽科開設を中心に—」	—	平成25年11月	東洋音楽学会第64回大会(静岡文化芸術大学)	【パネリスト】酒井健太郎、上田誠二、橋本久美子 戦後へと継続する音楽文化の構造が、1930~40年代前半にどのように制度化されたか、東京音楽学校に注目して検討したパネルディスカッション「1930~40年代の東京音楽学校」の一部として、東京音楽学校と「邦楽」のかかわりについて整理・報告した。東京音楽学校では開設時より「邦楽」の教習がおこなわれたが、1936年に至り改めて「邦楽科」が設置された背景には社会全体の国粋志向(つまり政治的含意)が強かったためであり、必ずしも「邦楽家」たちの芸術的要請がそれを推し進めたわけではないことを明らかにした。
1. 研究発表・報告	15「近代オリンピックと音楽芸術—文化プログラムと芸術競技」	—	平成25年12月	日本音楽芸術マネジメント学会第6回冬の研究大会(昭和音楽大学・南校舎)	【発表者】酒井健太郎、吉原潤 2020年のオリンピック東京大会における文化プログラムに関する議論の深化に貢献することをめざして、近代オリンピックの初期に実施された芸術競技(1912年第5回大会から1948年第14回大会)に注目して、その実施状況ならびに日本の参加状況を確認した。また、芸術競技がどのように評価(反省)され、以後の芸術展示や文化プログラムに繋がられたか、近代オリンピック創始者クーベルタンの芸術競技に関する思想と関連付けて検討した。
1. 研究発表・報告	16「日本開催のオリンピックにおける音楽活動の役割」	—	平成25年12月	日本音楽芸術マネジメント学会第6回冬の研究大会(昭和音楽大学・南校舎)	【発表者】吉原潤、酒井健太郎 日本ではこれまでに、東京(1964年)、札幌(1972年)、長野(1998年)の計3回のオリンピックが開催された。本報告は2020年の東京オリンピックに向けた文化芸術分野の活動に資することを目的に、これまでの3大会における一連の文化的行事に注目して、なかでも音楽芸術がいかに活用されたかを検証した。
1. 研究発表・報告	17「東京音楽学校と邦楽—1936(昭和11)年の邦楽科開設を中心に—」	—	平成26年1月	洋楽文化史研究会第78回例会(早稲田奉仕園・セミナーハウス)	【パネリスト】上田誠二、酒井健太郎、橋本久美子 パネルディスカッション「音楽は教育や社会といかなる関係を結んできたか—1930~40年代の東京音楽学を事例に考える」の一部として、東京音楽学校と「邦楽」のかかわりについて整理・報告した。東京音楽学校では開設時より「邦楽」の教習がおこなわれたが、1936年に至り改めて「邦楽科」が設置された背景には社会全体の国粋志向(つまり政治的含意)が強かったためであり、必ずしも「邦楽家」たちの芸術的要請がそれを推し進めたわけではないことを明らかにした。東洋音楽学会第64回大会でのパネルディスカッション「1930~40年代の東京音楽学校」(平成25年11月)に新たな論点を加えたもの。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
1. 研究発表・報告	18「1930～40年代のタイ-日本の文化交流事業について」	—	平成26年8月	タイ国日本研究国際シンポジウム2014 (チュラーロンコーン大学・文学部マハーチャクリーシリントン・ビル)	1930-40年代のタイと日本のおこなわれた文化交流事業のありようを、特に1942年締結の日泰文化協定と翌年設立の日泰文化会館に注目して検討した。その結果、当時の両国間の文化交流の取り組みにおいては、日本側に積極的な姿勢が見られるが、タイ側はそれほど積極的であったとは言えないことが明らかになった。これには両国を取り巻く国際関係や国内政治の状況が強く影響していたと考えられる。
1. 研究発表・報告	19「藤原義江と外務省1936-1938—南米演奏旅行を中心に」	—	平成26年10月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所 研究員会議(昭和音楽大学・南校舎)	藤原義江(1898-1976)は「われらのテナー」と評され愛された。彼の音楽活動や人生については、これまでに複数の自伝・評伝・小説が刊行され、おおよそのことは明らかになっているように思える。しかし詳細に検討すると、従来の言説には欠落や齟齬が少なくないことがわかる。1937-38年の南米演奏旅行はその一例である。そこでこの演奏旅行に関する外務省記録をもとに、この藤原の足取りを整理・報告した。
1. 研究発表・報告	20「だれがどのように能楽を享受したか—近代日本の「能楽観」の変化について—」	—	平成26年11月	第10回国際日本語教育・日本研究シン ポジウム(香港大学・HKU Space)	近代日本人の音楽観から、近代日本の文化的アイデンティティを透かし見ることができよう。ただしそれには、西洋由来の音楽だけでなく、日本の伝統音楽・芸能が、社会的にどのように位置づけられたかを考慮する必要がある。本発表は伝統音楽・芸能のうち能楽を対象とし、近代日本人の観能態度のありようとその変化について検討した。それをもとに能において庶民が楽しむ「芸能・娯楽」から、集中的・構造把握的な鑑賞の対象としての「芸術」への変化があったことを指摘した。
1. 研究発表・報告	21「近代日本のラジオ放送における音楽文化とアイデンティティ形成に関する基礎的研究に向けて」	—	平成27年8月	共同研究「近代日本のラジオ放送における音楽文化とアイデンティティ形成に関する基礎的研究」研究者会議(沖縄県立芸術大学)	近代日本のラジオ放送が日本の音楽文化と文化的アイデンティティの形成にいかなる影響を与えたかを問う共同研究の研究者会議にて、音楽文化と文化的アイデンティティの関係についての酒井のこれまでの研究成果を報告した。
1. 研究発表・報告	22「日泰文化会館の成立」	—	平成27年9月	シンポジウム「日タイ交流史研究の新地平——大島圭介の『暹羅紀行』(1875)から広がる新地平」(チュラーロンコーン大学・文学部マハーチャクリーシリントン・ビル)	1942年に日本とタイの間で締結された日泰文化協定とそれにもとづいて翌年設立された日泰文化会館を対象に、協定成立・会館設立の経緯および会館の事業、さらにそこに透けて見える両国の思惑を論じた。特に日泰文化会館の初代館長を務めた柳沢健は、文化相対主義的な傾向を持っていたこと、そのため帝国主義的な文化外交をめざした日本外務省と、日本の文化的侵略から自国を防衛したい(と同時に東南アジアに対する文化的覇権の確立を目指す)タイ国当局との間の調整役として苦労したことを明らかにした。
1. 研究発表・報告	23「音楽家クlaus・プリングスハイム研究の意義」	—	平成27年9月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所 研究員会議(昭和音楽大学・南校舎)	クlaus・プリングスハイム(1883-1972年)は、若い頃にG. マーラーに師事した。1932年に来日して以降、亡くなるまでのほとんどの期間を日本で過ごし、指揮、作曲、評論、教育等の音楽活動を続けた。ノーベル文学賞作家トーマス・マンの妻カチャの双子の兄としても知られる。日本の音楽文化の隆盛への、ことに教育の領域における貢献の度合いが大きく、その観点で言及されることが多い。一方で彼が日本と西洋の間で、音楽家や情報の交流の窓口としての役割を果たしていたことはあまり注目されていない。このことを指摘し、今後の課題を整理した。
1. 研究発表・報告	24「『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年、朝日新聞社)がめざしたこと」	—	平成27年11月	東洋音楽学会第66回大会(東京芸術大学)	【パネリスト】丸山彩、酒井健太郎、織田康孝、松岡昌和 パネルディスカッション「アジア・太平洋戦争期の南方向け音楽工作」の一部として、1943年刊行の『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』の刊行に至る経緯と内容を紹介し、それが刊行された目的を社会情勢に関連付けて論じた。
1. 研究発表・報告	25「昭和期日本の「文化使節」について—音楽分野を中心に—」	—	平成27年11月	日本音楽芸術マネジメント学会第8回秋 の研究大会(昭和音楽大学・南校舎)	【発表者】酒井健太郎、吉原潤 日本の文化外交の今後のあり方を考えるために、歴史的経緯の把握に努めた。具体的には音楽分野における「文化使節」の3つの事例(吉田晴風、昭和12年・アジア、古賀政男、昭和13-14年・アメリカ、松浦豊明、昭和38年・中南米)を検証し、外務省の文化外交に関する考え方を論じた。
1. 研究発表・報告	26「〈平成〉の社会と音楽」	—	平成28年6月	洋楽文化史研究会第84回例会(早稲田 奉仕園・セミナーハウス)	『〈戦後〉の音楽文化』(青弓社、平成28年1月)の刊行をきっかけとして開催された研究例会「〈戦後〉の音楽文化を考える」において、第5章「平成」期の音楽文化について、「J-POP ～グローバル化～」と「ナショナルリズム」の条件～「J」～「ポスト・モダン」の分裂」を語る言葉としての音楽」「先祖返りする音楽・記憶された音楽」「物とデータ/所有とアクセス」「寄り添う音楽」といった視点から論じた。
1. 研究発表・報告	27「フランツ・エッケルト研究の最前線」	—	平成28年7月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所 研究員会議(昭和音楽大学・南校舎)	ヘルマン・ゴツェフスキ(東京大)を中心に進められている、フランツ・エッケルトの日本と韓国における業績の解明の研究の進捗状況を整理して報告した。エッケルトを、音楽だけでなく音楽文化・情報の媒介者であったと捉えうること、そうした視点はエッケルトのみならず、他の音楽関係者にも適用しうることを述べた。
1. 研究発表・報告	28「クlaus・プリングスハイムの事業—(戦後)日本を中心に—」	—	平成28年9月	洋楽文化史研究会第86回例会(早稲田 奉仕園・アイビーハウス)	酒井がクlaus・プリングスハイム(1883-1972)に関してこれまでにおこなった調査・研究のトピックとその成果を報告した。特にアジア・太平洋戦争後の日本への海外音楽家/団体の招聘公演や日本人音楽家の海外留学のうち、彼が関わっていたとみられる事例をとりあげ、彼が日本と海外の音楽界を繋ぐ活動をしてきたとみられることは、彼の日本の音楽界への貢献の見逃せない一面でありうると指摘した。
1. 研究発表・報告	29「『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』がめざしたこと:企画、編集、刊行」	—	平成28年11月	第11回国際日本語教育・日本研究シン ポジウム(香港公開大学・銀禧学院)	【パネリスト】松岡昌和、酒井健太郎、丸山彩、織田康孝 パネルディスカッション「アジア太平洋戦争期の日本軍政下「南方」における文化政策:『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)を中心に」の一部として、1943年刊行の『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』の刊行に至る経緯と内容を紹介し、この唱歌集の編集・刊行の目的、掲載された唱歌と絵に見て取ることができるナショナルリズムとオリエンタリズムの差、メディア・イベントとしての編集・刊行事業などのトピックについて検討した。
1. 研究発表・報告	30「日本近現代音楽史研究におけるデジタル・アーカイブの活用事例と課題—昭和音楽大学オペラ研究所「オペラ情報センター」を中心に—」	—	平成28年12月	日本音楽芸術マネジメント学会第9回冬 の研究大会(昭和音楽大学・南校舎)	【発表者】酒井健太郎、吉原潤 昨今デジタル・アーカイブの整備が急速に進められている。発表者らの勤務先でも日本でのオペラ公演に関する資料のアーカイブ化とウェブ・データベースの整備がおこなった。本発表ではまず近年のデジタル・アーカイブに関する事業を概括し、発表者らが関わった事業の実施の経緯と工夫、成果について報告した。またこれによって整備されたデータベースを活用した近現代日本の音楽史研究の事例を紹介し、そこで把握された課題や留意事項について述べた。酒井は主に後半部分を担当した。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
1. 研究発表・報告	31「昭和初期の対外文化政策としての国際交換放送—音楽・芸能分野を中心に」	—	平成28年12月	日本音楽芸術マネジメント学会第9回冬の研究会(昭和音楽大学・南校舎)	日本のラジオの本放送が始まったのは1925年のことである。1930年には国際交換放送がおこなわれるようになり、1935年には海外放送が開始された。本発表では特に国際交換放送に注目して、これを日本の対外文化事業と関連付けて把握して、国際交換放送を通じて対外的にどのような音文化を発信すべきと考えられたか考察した。
1. 研究発表・報告	32「昭和初期の国際交換放送にみる日本人の文化的アイデンティティ—音楽・芸能分野を中心に」	—	平成28年12月	共同研究「近代日本のラジオ放送における音楽文化とアイデンティティ形成に関する基礎的研究」研究者会議(沖縄県立芸術大学)	まず国際交換放送と海外放送では、目的、実施方式、放送内容など多くの要素が異なり、両者は放送の形態として区別して捉えるべきであることを確認した。その上で海外諸国・諸地域との交換放送の事例をいくつか紹介し、これらを対外文化宣伝事業と関連付けて捉える必要性を指摘した。さらに今後の研究の進め方や課題について述べた。
1. 研究発表・報告	33 'Musical Contribution of Klaus Pringsheim (1883-1972) in Japan: Focusing on his liaison role'	—	平成29年3月	The 20th Congress of the International Musicology Society, Tokyo 2017(東京芸術大学・上野キャンパス)	In this presentation, Klaus Pringsheim's post-war music activities was followed with as much detail as possible, based on the results of interviews with the persons who knew him, as well as on newly acquired primary sources. Then his contribution to music in Japan was examined, focusing on his liaison role. (本発表は、まず、クラウス・プリングスハイムを知る人物へのインタビュー調査と新入手の一次資料を用いて、彼の戦後の音楽活動をきりぎりし詳しく跡付けた。その上で彼の日本の音楽界への貢献を、特に(リエゾンの役割に注目して検討した。)
1. 研究発表・報告	34「『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』の編纂・刊行とその狙い」	—	平成29年6月	洋楽文化史研究会第90回例会『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)の編纂・刊行と「南方」への展開(池袋ホール)	1943年刊行の『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』について、特に「南方」への展開に注目したパネルディスカッションをおこなった(酒井以外のパネリストは松岡昌和、丸山彩、織田康孝の各氏)。酒井は『ウタノエホン』の企画から編纂、刊行の経緯を整理し、同時代の資料をもとにその狙いを明らかにし、それもとに『ウタノエホン』の対内的・対外的のそれぞれの意義・目的を考察した。
1. 研究発表・報告	35「ドイツ人音楽家クラウス・プリングスハイム(1883-1972)が繋いだ日本とタイ」	—	平成29年7月	日タイ言語文化研究会第5回東京大会(大東文化会館・ホール)	クラウス・プリングスハイム(1883-1972)は、指揮者、作曲家、音楽評論家、音楽教育者として知られる。1931年の来日以後、死去までのほとんどの期間を日本を拠点に活動した。1937-39年に彼はシャム(現在のタイ)に滞在し、現地で音楽学校を設立する計画に関与した。それは実現しなかったが、その後も彼とタイの関係者間で交流が続いた。本研究では彼とタイの関係者との間でやり取りされた書簡を分析した。
1. 研究発表・報告	36「昭和初期の国際交換放送にみる「日本らしさ」」	—	平成29年11月	東洋音楽学会第68回大会、パネルディスカッション「近代日本のラジオ放送が届けた音楽文化」(沖縄県立芸術大学)	まず国際交換放送と海外放送では、目的、実施方式、放送内容など多くの要素が異なり、両者は放送の形態として区別して捉えるべきであることを確認した。その上で海外諸国・諸地域との交換放送の事例を整理し、それらの放送プログラムに用いられた音楽をジャンル(種目)で分類し、数的処理をおこない、放送の相手国・地域との相関があるか検討した。そのうえで、対外文化宣伝のコンテンツと文化的アイデンティティの関係をもとに捉えるべきか、考察した。
1. 研究発表・報告	37「近代日本の対外文化発信:または「自分探し」朴祥美氏の新著を手がかりに」	—	平成30年2月	洋楽文化史研究会第93回例会「朴祥美『帝国と戦後の文化政策:舞台の上の日本像』(岩波書店、2017年)書評会」(早稲田奉仕園)	1930年代の日本の文化的晴況(文化的アイデンティティの側面を含む)を把握した上で、朴祥美『帝国と戦後の文化政策:舞台の上の日本像』(岩波書店、2017年)の書評をおこない、さらに今後の研究の進むべき方向を検討した。
1. 研究発表・報告	38「日本とタイのラジオ放送による交流—昭和10年代を中心に」	—	平成30年7月	日タイ言語文化研究会第6回東京大会(大東文化会館・ホール)	昭和10年代の日本とタイの間に、ラジオ放送を通じてどのような交流があったか明らかにするために、外務省の文書、新聞、雑誌等を用いて論じた。管見の限り、日タイ間の放送による交流のもっとも早いものは1932年12月10日におこなわれた。また両国間の定期交換放送は1942年2月28日に開始したが、継続的な実施は短期間で終了したものとみられる。
1. 研究発表・報告	39「1937年の訪暹音楽・舞踊使節について:日本とタイの文化交流の一事例として」	—	平成30年8月	タイ国日本研究国際シンポジウム2018(チュラーロンコーン大学文学部マハーチャクリーシリントンビル)	1937年の吉田晴風らの暹羅(シャム)訪問に関する資料調査・分析をおこない、その日タイ関係史(日本の対外文化事業史)における位置付けを検討した。使用した資料は吉田晴風に関連する資料、新聞、雑誌、外務省記録などである。その結果、吉田の訪暹は、外務省が主体として実施したものはなかったが、外務省の担当官が携わっていたことが判明した。その担当官は、1942年から日タイ文化交流政策に中心的に関わることになる柳澤健で、1937年の吉田訪暹を支援したことはその伏線の一つであるかもしれない。
1. 研究発表・報告	40「1930年代の日本の文化的アイデンティティ—ラジオの国際放送における音楽コンテンツの分析から」	—	平成30年12月	第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム(香港理工大學)	本発表の目的は、1930年代の日本の放送局がおこなった「国際放送」で用いられた音楽コンテンツを整理・分析し、当時の日本人の「文化的アイデンティティ」を考察する足がかりを得ることである。1930年代の新聞記事をもとに調査し、特に音楽コンテンツに注目して類型化を試みた。その結果、「洋楽」より「邦楽」が若干多く、その中では「古典的な邦楽」より「現代化された邦楽」が多いことがわかった。
1. 研究発表・報告	41「〈文化〉、取扱注意」	—	平成30年12月	日本音楽芸術マネジメント学会第11回冬の研究会[前夜祭]ラウンドテーブル「異文化と自文化の境界—〈文化〉再考」(昭和音楽大学南校舎)	主に昭和期の対外文化事業において、「日本文化」が選択的に創出されていった経緯を紹介し、「文化」とは、確固たる(すでにそこにある)「何か」ではなく、多分に(あるいは完全に)社会構築的であるため、その取り扱いには注意を要すると述べた。
1. 研究発表・報告	42「中国伝統音楽・芸能の諸相:伝統音楽・楽器のマーケティングの検討にむけて」	—	平成31年2月	昭和音楽大学アートマネジメント研究所研究員会議(昭和音楽大学・南校舎)	昭和音楽大学修士課程アートマネジメントコースで学ぶ中国からの留学生が増加したことを鑑み、彼/彼女らがどのような音楽環境にいたか/どのような音楽文化の継承者であるか、中国の大衆的な音楽文化についての情報を整理・共有した。
2. 小論・記事等	1「明治初期の「国楽」概念について—国民国家形成と欧化」	単著	平成17年冬	美学会『美学』、第56巻3号(通223号)、65頁	明治期の「国楽」概念を「国民国家の形成」と関連づけて論じた。「国楽」創成の主張および西洋音楽の導入は、日本の近代化における文化政策の一環であり、両者は密接に関連していたことを明らかにした。第56回美学会全国大会(平成17年10月8日)における研究発表の要旨。
2. 小論・記事等	2「西洋音楽受容の政治的意図—対外宣伝の側面に注目して」	単著	平成18年5月	日本音楽学会『音楽学』、第51巻3号、226~227頁	明治期の日本のおかれた国際的状況を把握し、それをもとに、音楽取調掛による「対外文化宣伝」的な効果を期待する事業について、その「近代性」の観点から整理・検討した。対外的な文化宣伝政策は、政策主体の文化的アイデンティティと深く関係していると論じた。日本音楽学会第56回全国大会(平成17年10月23日)での研究発表の要旨。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
2. 小論・記事等	3「日本音楽学会関東支部・洋楽文化史研究会合同例会(洋楽文化史研究会第40回例会)『戦争・メディア・音楽—二つの大戦と日本の音楽文化—』傍聴記」	単著	平成18年11月	日本音楽学会『関東支部通信(電子版)』、第71号	シンポジウム「戦争・メディア・音楽 —二つの大戦と日本の音楽文化—」(平成18年9月9日)の傍聴記を寄稿した。特に戦時期の音楽状況と、当時のメディアに見られる国家主義思想の関連についての議論に注目した。4人の研究者によるメディア論、日本史学、音楽学などの領域にまたがった討論には啓発されることが多く、好企画であったと評した。
2. 小論・記事等	4「私的解題・早坂文雄～主要作品に寄せて『序曲二調』(1939)」	単著	平成18年12月	オーケストラ・ニッポニカ第10回演奏会「早坂文雄作品展」プログラム冊子、14頁	早坂文雄の「序曲二調」について、彼の「日本的なもの」に関する思想と関連付けて述べた。パッサ・オスティナートを多用しそれを「民族的」として伊福部昭の音楽と対照的に、早坂の音楽では「民族性」はそのようにわかりやすく表現されない。「序曲二調」は反復に伴い高揚するもの、最終局面でも弾けずにパワーを保持したまま終わる。早坂の「民族性」はこのエネルギーの凝集において表現されているのかもしれない。
2. 小論・記事等	5「近代日本の「南方関与」と音楽」	単著	平成20年2月	洋楽文化史研究会特別企画「再現演奏会1941-1945 ～日本音楽文化協会の時代～」プログラム冊子、30～31頁	十五年戦争期の日本の南方関与における文化の活用についての研究状況を、特に音楽に重点を置いて整理した。さらに、それをもとに今後の研究がとるべき方向性を検討した。大東亜共栄圏の思想は日本の対外的な行動を基礎づける思想であったが、他方では日本国民の「大東亜共栄圏民化」を推し進める対内的な思想でもあった。今後の研究はこの点に留意して進められる必要がある。
2. 小論・記事等	6「曲目解説」	単著	平成21年8月	メロスフィルハーモニー第14回演奏会プログラム冊子	ベートーヴェン/「レオノーレ」序曲第3番、同/ピアノ協奏曲第3番、メンデルスゾーン/演奏会用序曲「フィンガルの洞窟」、シューベルト/交響曲第7(8)番「未完成」について、各作品の成立に至る経緯と構成、聴きどころを解説した。また、各作品の調性の関係に言及し、プログラム全体の構造の面白さを述べた。さらに、筆者の研究の成果を活かして、各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	7「曲目解説」	単著	平成22年9月	メロスフィルハーモニー第15回演奏会プログラム冊子	モーツァルト/歌劇《魔笛》序曲、同/ピアノ協奏曲第24番、シューベルト/交響曲第8番「グレイト」について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを解説した。また、各作品の調性の関係に言及し、プログラム全体の構造の面白さを述べた。さらに、筆者の研究の成果を活かして、各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	8「曲目解説」	単著	平成23年8月	メロスフィルハーモニー第16回演奏会プログラム冊子	ヴェーバー/歌劇「オベロン」序曲、ハイドン/交響曲第103番「太鼓連打」、シューマン/交響曲第3番「ライン」について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを解説した。特にシューマン作品については拍節構造に注目した。また、各作品の調性の関係に言及し、プログラム全体の構造の面白さを述べた。さらに、筆者の研究の成果を活かして、各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	9「仙台フィルハーモニー管弦楽団と「音楽の力による復興センター」の取り組み」	共著	平成23年9月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第3号、50～60頁	【著者】酒井健太郎、赤木舞 平成23年3月11日の東日本大震災発生以降の仙台フィルハーモニー管弦楽団による、被災した地域等における音楽活動の現状と課題を、同楽団専務理事の大澤隆夫氏へのインタビューと新聞・雑誌の記事等をもとにレポートした。また、震災発生約2週間後におこなわれた最初の復興コンサートについて、同コンサートを指揮した佐藤寿一氏へのインタビューをもとにレポートした。酒井はインタビュー、原稿作成など全般を担当した。
2. 小論・記事等	10「紹介 平成22年度昭和音楽大学共同研究 研究成果報告書『公立文化施設の指定管理者制度における評価の現状とそのあり方 ～川崎市と横浜市を事例に～』」	単著	平成23年9月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第3号、204～205頁	昭和音楽大学の教員を中心としておこなわれた共同研究「指定管理者制度を導入した公立文化施設のの実態調査 ～横浜・川崎地区を中心に～」(平成22年度)の成果報告書について紹介し、本調査・研究の特色は、指定管理制度における「評価」の局面に注目したこと、そしてそれを文化施設のよりよい管理・運営に結びつけることの必要性を指摘したことにあると述べた。
2. 小論・記事等	11「レポート オペラにおける舞台美術の今日的表現」	単著	平成24年3月	昭和音楽大学舞台芸術センター オペラ研究所『オペラ劇場における人材育成システムに関する研究 研究成果報告書』、148～152頁	昭和音楽大学オペラ研究所の「オペラ劇場における人材育成システムに関する研究」プロジェクトの一環として開催された、公開研究会「オペラにおける舞台美術の今日的表現」(平成22年12月20日)における、今日の舞台美術とオペラ演出の課題、舞台美術家と演出家の仕事、さらには舞台美術家と演出家に求められる資質に関する議論について報告した。
2. 小論・記事等	12「曲目解説」	単著	平成24年9月	メロスフィルハーモニー第17回演奏会プログラム冊子	ヴェーバー/歌劇「オリアンテ」序曲、ブラームス/ピアノ協奏曲第2番、シューマン/交響曲第2番について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを解説した。また、3人の作曲者の関係に言及して、プログラム全体の構造の面白さを述べた。さらに、筆者の研究の成果を活かして、各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	13「書評 長木誠司『戦後の音楽—芸術音楽のポリティクスとポエティクス』」	単著	平成24年10月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第4号、129～131頁	第2次世界大戦後の日本の音楽の状況を、GHQの音楽政策、合唱運動・うたごえ運動、十二音技法、オペラ、映画の音楽、放送、音楽批評の諸視点から明らかにした浩瀚な一書を探り上げて、伝統の創造、想像の共同体、アイデンティティなど、こゝにちの歴史研究に必須の概念を理解したうえで書かれた本書は、今後の音楽史記述のスタンダードを提示したものであり、さらに音楽と社会構造の連関を書いた社会史としても読みみると評した。
2. 小論・記事等	14「報告 茂手木潔子「E. S. モースコレクションにおける1882年～1921年頃収集の日本の楽器」」	単著	平成24年11月	東洋音楽学会『東日本支部だより』、第30号、8頁	東洋音楽学会東日本支部第66回定例研究会(平成24年7月7日)での研究報告をレポートした。大森貝塚の発見者として知られるモースは、明治10年代に日本に滞在し、日本の文物を多く収集した。茂手木氏の研究は、モースの収集品中の楽器・音具と彼の日本での見聞をまとめた手稿の記述を突き合わせることで、19世紀の日本の音を立体的に捉えることを目指すもので、成果が期待される。
2. 小論・記事等	15「第63回大会レポート プレセッション「震災後の民俗芸能の復興その後」」	単著	平成25年1月	東洋音楽学会『東洋音楽学会会報』、第87号、1～2頁	東洋音楽学会第63回大会のプレセッション「震災後の民俗芸能の復興その後」(平成24年11月10日)の模様をレポートした。岩手県の鶴鳥神楽は、拠点の多くが東日本震災により失われ、活動の継続に困難が生じている。本セッションではその復興の現状と見通しが報告され、神楽成立のためのコミュニティと場の復興という課題が示された。また災害時など日常と異なる状況におけるアート・マネジメントの研究の深化が急務であると訴えられた。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
2. 小論・記事等	16「音楽の力」による復興の取り組み	共著	平成25年3月	文化芸術による復興推進コンソーシアムウェブサイト『「文化芸術活動の被災及び復興の状況(被災地からの報告)～2012年度～」』	【著者】酒井健太郎、赤木舞 平成23年3月11日の東日本大震災発生以降、一般財団法人音楽の力による復興センター・東北と公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団は、被災した方々に音楽を届ける取り組みを続けている。本稿では前者で代表理事、後者で参与を務める大澤隆夫氏へのインタビュー(平成25年2月実施)をもとに、音楽の力を活用した復興の状況をレポートし、今後の課題について検討した。酒井はインタビューと原稿作成など全般を担当した。本稿はウェブサイトならびに冊子体の報告書に掲載された。(掲載URL: http://bgfsc.jp/column/column-data/1216)
2. 小論・記事等			同上	文化芸術による復興推進コンソーシアム 平成24年度調査研究報告書参考資料②『活動報告集——文化芸術による復興推進に向けて』、4～6頁	
2. 小論・記事等	17「曲目解説」	単著	平成25年9月	メロスフィルハーモニー第18回演奏会プログラム冊子	メンデルスゾーン/「真夏の夜の夢」序曲、ハイドン/交響曲第92番「オックスフォード」、シューマン/交響曲第1番「春」について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを、プログラム全体の面白さに注目しつつ解説した。あわせて各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	18「紹介 音楽芸術マネジメントに関する年鑑、調査研究報告書など(発行順)」	単著	平成25年10月	日本音楽芸術マネジメント学会『音楽芸術マネジメント』、第5号、132～134頁	音楽芸術のマネジメントや政策に関する刊行物を紹介した。取り上げたのは、『演奏年鑑2013——音楽資料』、『日本のプロフェッショナル・オーケストラ年鑑2012』、『日本のオペラ年鑑2011——時代の人材育成に向けて』(以上文化庁「平成24年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」)、文化芸術による復興推進コンソーシアムの報告書等(『文化芸術による復興推進に関する調査研究——文化芸術関係機関、団体等の相互支援、共助による復興推進の仕組みづくりについて』、『調査研究事業関係資料』、『活動報告集——文化芸術による復興推進に向けて』、『文化芸術を復興の力にⅡ』、『クラシック音楽事業ガイド2013』である(以上発行順)。
2. 小論・記事等	19「曲目解説」	単著	平成26年9月	メロスフィルハーモニー第19回演奏会プログラム冊子	メンデルスゾーン/交響曲第4番「イタリヤ」、シューマン/交響曲第4番について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころならびに2人の作曲家の関係を、プログラム全体の面白さに注目しつつ解説した。あわせて各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	20「曲目解説」	単著	平成27年8月	メロスフィルハーモニー第20回演奏会プログラム冊子	モーツァルト/歌劇「後宮からの誘拐」序曲、同/クラリネット協奏曲、ハイドン/交響曲第100番「軍隊」について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころ、当時のトルコ趣味のこれらの作品への影響、さらに2人の作曲家の関係について解説した。あわせて各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	21「義江の南米演奏旅行(1937～38年)と外務省」	単著	平成27年9月	『われらのテナー 藤原義江記念館友の会会報』、第24号、2-3頁	藤原義江は昭和12-13年の南米への演奏旅行について、彼が多く残した文章(自伝・回想録含む)では無視するか、あまいに書いてお茶を濁している。そのため、この演奏旅行についてはあまり知られていない。しかし、この旅行の一部について外務省が支援したために、外務省記録が残されている。このことについて紹介した。
2. 小論・記事等	22「クリスタルジョイント-59《恋、光、郷愁》(音楽案内)」	単著	平成28年5月	公演「クリスタルジョイント-59《恋、光、郷愁》」プログラム冊子	演奏曲目について簡単な説明(イメージ)を記すとともに、音楽と記憶の関係に言及した。記述にあたっては、来場者がコンサートをリラックスして楽しむのを手助けするような文章になることを心がけた。
2. 小論・記事等	23「曲目解説」	単著	平成28年9月	メロスフィルハーモニー特別演奏会プログラム冊子	モーツァルト/交響曲第41番、同/レクイエムについて、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを解説した。あわせて各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	24「クリスタルジョイント-60《空に、優雅に、思うがままに》(音楽案内)」	単著	平成28年11月	公演「クリスタルジョイント-60《空に、優雅に、思うがままに》」プログラム冊子	演奏曲目について簡単な説明(イメージ)を記し、色彩豊かなプログラムが秋に相応しいと述べた。執筆にあたっては、来場者がコンサートをリラックスして楽しむのを手助けするような文章になることを心がけた。
2. 小論・記事等	25「ゆたかな響き、つながる歓び」(音楽案内)	単著	平成28年12月	公演(第九と皇帝)プログラム冊子、7頁	ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」と交響曲第9番「合唱」の成立の経緯や聴きどころを紹介した。記述にあたってはわかりやすさを心がけ、音楽のイメージの記述を交えるなど、来場者がリラックスして楽しめるよう工夫した。
2. 小論・記事等	26「『第九と皇帝』と日比谷公会堂と熊谷弘」	単著	平成28年12月	公演(第九と皇帝)プログラム冊子、10～11頁	「第九と皇帝」のシリーズが始まったのは1981年である。初回から8回までの公演は日比谷公会堂が会場とされた。その日比谷公会堂の来歴と現在について紹介した。また同シリーズをプロデュースし、1987年からは指揮している熊谷弘の理念にも言及した。
2. 小論・記事等	27「Musical Contribution of Klaus Pringsheim (1883-1972) in Japan: Focusing on His Liaison Role」(英文) (「クラウス・プリングスハイム(1883-1972)の日本における音楽的貢献——(リエゾン)の役割に注目して」)	単著	平成29年3月	Program and Abstracts of The 20th Congress of the International Musicology Society, Tokyo 2017, p.146	In this abstract, plan for the presentation at the Congress was described: Klaus Pringsheim's music activities after the end of World War II will be followed with as much detail as possible, based on the results of interviews with the persons who knew him, as well as on primary sources. Then his contribution to music in Japan will be examined, focusing on his liaison role. (第2次世界大戦後のクラウス・プリングスハイムの音楽活動を、彼を知る人へのインタビュー調査や第一次資料に拠り、できるかぎり詳細に跡付け、その上で、日本の音楽界への貢献を、特に(リエゾン)の役割に注目して検討する、という発表の概要(予定)を記載した。)
2. 小論・記事等	28「『日本の音楽展』の楽しみ」	単著	平成29年4月	公演(日本の音楽展(XXXIX))プログラム冊子、2頁	日本人作品によりプログラムが構成される公演「日本の音楽展」第39回(という事は39年目ということ)で配付されるプログラム冊子に、音を「聴く」と「音楽」の関係、さらに音楽に共感することについて、寄稿した。
2. 小論・記事等	29「洋楽導入150年、かくも豊かなその精華」(音楽案内)	単著	平成29年4月	公演(日本の音楽展(XXXIX))プログラム冊子、10～13頁	西洋音楽の導入から約150年を経た日本の音楽文化史を念頭に置きつつ、第39回「日本の音楽展」の演奏曲目について、聴きどころを紹介した。
2. 小論・記事等	30「洋楽寄席・・・聴衆と演奏者が一体になって」(公演案内)	単著	平成29年7月	公演(洋楽寄席特別例会(九))リーフレット、ノンブルなし	嘶家を交えて開かれる異色のコンサート「洋楽寄席」の特別例会(この時は嘶家は出演しない)の売りや聴きどころなどを紹介する案内文を寄稿した。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
2. 小論・記事等	31「曲目解説」	単著	平成29年9月	公演(メロスフィルハーモニー第21回演奏会)プログラム冊子	ブラームス/《悲劇的序曲》、モーツァルト/フルート協奏曲第2番、メンデルスゾーン/交響曲第5番《宗教改革》について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを解説した。あわせて各作品の日本における受容(日本初演)について紹介した。
2. 小論・記事等	32「クリスタルジョイント-61《空に、優雅に、思うがままに》(音楽案内)	単著	平成29年9月	公演(クリスタルジョイント-61《空に、優雅に、思うがままに》)プログラム冊子	演奏曲目について簡単な説明(イメージ)を記し、色豊かなプログラムが秋に相応しいと述べた。執筆にあたっては、来場者がコンサートをリラックスして楽しむのを手助けするような文章になることを心がけた。
2. 小論・記事等	33「オリンピックの記憶は音楽とともに」	単著	平成29年11月	東京交響楽団『Symphony』、18～20頁	オリンピックと音楽の関係について、まずは両者に関するエピソードをいくつか挙げて紹介し、その上でオリンピックにおける「芸術競技」、さらに近年の「文化プログラム」に言及した。
2. 小論・記事等	34「お客様と演奏者が一体になる「晴れ舞台」」	単著	平成29年12月	公演(第九と皇帝)プログラム冊子、7頁	ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」と交響曲第9番「合唱」の成立の経緯や聴きどころ、演奏者を紹介した。記述にあたってはわかりやすさを心がけ、音楽のイメージの記述を交えるなど、来場者がリラックスして楽しめるよう工夫した。
2. 小論・記事等	35「『第九と皇帝』を彩る出演者～ホールも楽器、あなたも音楽の参加者～」	単著	平成29年12月	公演(第九と皇帝)プログラム冊子、8～10頁	「第九と皇帝」の出演者を紹介した。「第九」と「皇帝」の出演者だけでなく、開演前のファンファーレや休憩時のパフォーマーも公演の大事な要素であると、さらには音楽を生み出す一つの大きな楽器として、ホール(サントリーホール)を取り上げた。
2. 小論・記事等	36「日本の音楽作品を慈しみ、楽しむ」	単著	平成30年1月	公演(日本の音楽展(XL))プログラム冊子、2頁	第40回を迎えた「日本の音楽展」で配付されるプログラム冊子に、ある作品は時間をかけて演奏を繰り返されることによりマスターピースになっていくこと、「音楽」は「いま、ここ」でしか体験することができない、時間・空間的に特殊な現象であることなどを書き、寄稿した。
2. 小論・記事等	37「150年をふり振り返り楽しむ『日本の音楽』(音楽案内)」	単著	平成30年1月	公演(日本の音楽展(XL))プログラム冊子、10～13頁	西洋音楽の導入から約150年を経た日本の音楽文化史(の豊かさ)を念頭に置きつつ、第40回「日本の音楽展」の演奏曲目について、聴きどころを紹介した。
2. 小論・記事等	38「クリスタルジョイント-62《空に、優雅に、思うがままに》(音楽案内)」	単著	平成30年6月	公演(クリスタルジョイント-62《空に、優雅に、思うがままに》)プログラム冊子	演奏曲目について簡単な説明(イメージ)を記した。喜怒哀楽の感情が豊かなプログラムであることを述べ、来場者がコンサートをリラックスして楽しむのを手助けするような文章になることを心がけた。
2. 小論・記事等	39「寄席で楽しむ音楽、寄席で育む音楽」		平成30年7月	公演「洋楽寄席特別例会(十)《愛・ロマン・熱情》」リフレット	翫家を交えて開かれる異色のコンサート「洋楽寄席」の特別例会(この回はヴァイオリン、ソプラノ、ピアノが登場)の売りや聴きどころなどを紹介する案内文を寄稿した。
2. 小論・記事等	40「曲目解説」		平成30年9月	公演(メロスフィルハーモニー第22回演奏会)プログラム冊子	ブラームス/交響曲第2番、ベートーヴェン/交響曲第6番《田園》について、各作品の成立に至る経緯と聴きどころを解説した。また音楽と視覚の関係に言及し、各作品の日本における受容(日本初演)のありようを紹介した。
2. 小論・記事等	41「先生のおすすめ資料 一動き続ける秩序ー」		平成30年10月	昭和音楽大学附属図書館ウェブページ『ショーワームの散歩道』Vol.5	若い人に福岡伸一(著)『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書、2007年)を読んでみてもらいたく、生命現象を音楽になぞらえて述べてみた。以下のURLにて公開= http://lib.tosei-showa-music.ac.jp/?page_id=206
2. 小論・記事等	42「傍聴記:中津川祥子「雑誌『オペラ評論』および『オペラ』にみるオペラの受容過程について」		平成30年11月	『(一社)東洋音楽学会 東日本支部だより』(48)、3～4頁	東洋音楽学会東日本支部第104回定例研究会(2018年5月26日)での研究報告(修士論文発表)をレポートした。関東大震災のために資料が多く焼失し、わからないことが多い浅草オペラに、当時の雑誌記事を分析することによって少しでも接近しようという研究で、今後の深化が期待されるあった。
2. 小論・記事等	43「38年目の『第九と皇帝』を彩る出演者」		平成30年12月	公演(第九と皇帝)プログラム冊子、7～9頁	「第九と皇帝」の出演者を紹介した。「第九」と「皇帝」の出演者、なかでも「第九」を歌う会について詳しく紹介するとともに、開演前のファンファーレや休憩時のパフォーマーも公演の大事な要素であるとした。
2. 小論・記事等	44「『いま、ここ』で音楽を分かち合う」		平成30年12月	公演(第九と皇帝)プログラム冊子、10頁	ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」と交響曲第9番「合唱」の成立の経緯や聴きどころ、演奏者を紹介した。記述にあたってはわかりやすさを心がけ、音楽のイメージの記述を交えるなど、来場者がリラックスして楽しめるよう工夫した。
2. 小論・記事等	45「40年、140年、そして『いま、ここ』で」		平成31年1月	公演(日本の音楽展(XLI))プログラム冊子、2頁	満40年を迎えた「日本の音楽展」で配付されるプログラム冊子に、ある作品は時間をかけて演奏を繰り返されることによりマスターピースになっていくこと、音楽の聴き方は自由だが、時には音楽が入ってきたときの自分の反応を観察するような聴き方を試みてはいかかが、と提案した。
2. 小論・記事等	46「私たちにはこんなに豊かな音楽がある」		平成31年1月	公演(日本の音楽展(XLI))プログラム冊子、10～13頁	文部省音楽取調掛の設置から140年を経た日本の音楽文化史(の豊かさ)を念頭に置きつつ、第41回「日本の音楽展」の演奏曲目について、聴きどころを紹介した。
2. 小論・記事等	47「海をわたった唱歌『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(一九四三年のこと)」		平成31年3月	『音夢:わらべ館童謡・唱歌研究情報誌』(13)、2～13頁	1943年に発行された唱歌集・絵本『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(朝日新聞東京本社)について、それが「南方」向けにつくられたことを前提として、その成立過程、唱歌の歌詞が歌うこと、各唱歌に記された絵柄について紹介した。さらにそれが実際に「南方」に提供されたのか、十分でない状況証拠から推測を試みた。
3. 学術行事企画・実施等	1 研究会「クラウス・プリングスハイムの足跡をたどる～『ベルリン・東京物語』(音楽之友社、1994年)の著者、早崎えりな氏を囲んで」[企画・運営・進行等]	—	平成27年3月	早稲田奉仕団・セミナーハウス	ドイツ出身の作曲家・指揮者クラウス・プリングスハイム(1883-1972)は1931年の来日以後、死去するまでのほとんどの期間を日本で過ごし、音楽家の育成に寄与した。これに加えて彼は海外と日本の音楽家を繋ぐ窓口に役割を果たしたと推測されるが、いまだ詳細は明らかでない。そこで今後の研究の深化を期して、プリングスハイムの評伝『ベルリン・東京物語——音楽家クラウス・プリングスハイム』(音楽之友社、1994年)の著者、早崎えりな氏を迎えて、プリングスハイム研究の手法や経過、資料の所在などについて何う会を企画・開催した。
3. 学術行事企画・実施等	2 フランツ・エッケルト没後100周年記念特別展「近代アジアの音楽指導者エッケルト:プロイセンの山奥から東京・ソウルへ」[資料翻訳・編集、展示物作成]	—	平成28年3月(会期は3月12日～6月26日)	東京大学・駒場博物館	フランツ・エッケルト(1852-1916)は日本と韓国で、音楽文化の近代化に大きな役割を果たした。彼の没後100周年を記念して、彼が両国に残した業績とその文化的背景を顧みる展覧会を開催した(科研費基盤研究(B)26284018の成果として)。本展覧会では彼の生涯を新出の資料を含めてあらためて辿るとともに、特に彼の来日以前の経歴が、来日後の活動にどのような影響を与えたかという点に注目した。

種別	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌等 または発表学会等の名称	備考
3. 学術行事企画・ 実施等	3 国際シンポジウムと演奏会「フランク・ヴェクテルとその時代」[司会]	—	平成28年5月	東京大学・駒場 I キャンパス	フランク・ヴェクテルの生涯と日本と韓国で果たした役割を日韓両国の研究者により論じる国際シンポジウムと、彼が残した音楽作品を再現する演奏会を開催した(科研費基盤研究(B)26284018の成果として)。酒井は第2部ラウンド・テーブル「資料調査によって見えてくる新しいヴェクテル像」の司会を担当した。
3. 学術行事企画・ 実施等	4 洋楽文化史研究会第86回例会「クラウス・プリングスハイムが戦後日本で果たした役割」[企画・運営・進行等]	—	平成28年9月	早稲田奉仕園・アイビーハウス	ドイツ出身の作曲家・指揮者クラウス・プリングスハイム(1883-1972)が、1951年から死去するまでの間に、どのような音楽関連の活動をおこない、また日本の音楽界にどのような影響を与えたか検討するために、プリングスハイム研究家の牧野一男氏、武蔵野音楽大学でプリングスハイムの薫陶を受けた丸山嘉夫氏を招聘して、体験談や研究動向を伺う会の開催を企画し、実行した。
3. 学術行事企画・ 実施等	5 日本音楽芸術マネジメント学会第11回冬の研究大会[前夜祭]ラウンドテーブル「異文化と自文化の境界:〈文化〉再考」	—	平成30年12月	昭和音楽大学・南校舎	「文化」について論じるのには困難がつきまとう。その要因の一つには「文化」を明確に定義しにくいことがある。「文化」は視座によって異なる定義を与えられ、それぞれのやり方で扱われる。この多様性を、それとして共有する必要があると考え、文化政策・文化政策学、アートマネジメント、民俗芸能、文化人類学、国際文化交流・文化外交、歴史学、博物館学、ポスト・コロナリズム、文化の盗用・摹倣の各領域を専門とする若手研究者・実践者によるラウンドテーブルを企画、コーディネート、運営した。
4. 講師等	1 「「国際共同制作」舞台の取材 & 情報発信ワークショップ」講師	飯田有抄氏と共同	平成29年9月	平成29年度文化庁・昭和音楽大学〈実演舞台芸術の国際共同制作を通じたアートマネジメント人材育成〉講座B(昭和音楽大学・南校舎)	昭和音楽大学のオペラ公演《ドン・ジョヴァンニ》を題材に、音楽の現場の取材と情報発信を体験するワークショップの講師を務めた。
4. 講師等	2 講座「オペラ公演をつくるには」受講者セッション講師	石田麻子氏と共同	平成29年10月	昭和音楽大学オペラ研究所〈オペラ制作講座〉第2回(昭和音楽大学・南校舎)	オペラ団体、劇場・音楽堂等の担当者を対象としたオペラ制作の公開講座のうち、受講者セッションにおいて講師を務めた。
4. 講師等	3 出張講義「私たちは音楽に何を聴いているのだろうか?」講師	単独	平成30年3月	(東京都立富士森高等学校)	高校生向けに、リミックス、引用、パロディなどの2次創作、さらにはボカロにおけるn次創作創作などを紹介し、このようにして音楽文化が積み重なり豊かになっていくことを解説した。その上で、人が音(楽)そのものというよりも、それにまつわる／そこから想起されるストーリーを楽しんでいるのではないかという仮説を投げかけた。
4. 講師等	4 出張講義「アートマネジメントとは & 私たちは音楽に何を聴いているのだろうか」講師	単独	平成30年12月	(東京都立富士森高等学校)	高校生向けに、アートマネジメントがどのような仕事であるか、昭和音楽大学アートマネジメントコースがそれをどのように実践的に修得するプログラムを展開しているか紹介した。また、私たちが音楽を聴くときには、単に音楽を(物理的な意味で)聴いているだけではなく、私たちの中にある要素(「記憶」)を掘り返しつつ楽しんでいるのではないかという考え方を、リミックス、引用、パロディなどの事例を挙げて紹介した。